報告

日本天文学会2002年秋期年会企画セッション「公開講座・一般公開」報告

沢　武文（愛知教育大学）

宮崎市の宮崎シーガイアにおいて開催された日本天文学会2002年秋季年会2日目の10月8日(火)9:30～12:30に、企画セッション「公開講座・一般公開」(コンビーナー：沢武文・加藤万里子)が行われた（図1）。これは、今回の秋季年会では、天文教育フォーラムを開催しないことにしたため、その代わりの試みとして行われたものである。コンビーナー制とは、講演時間やプログラム、発表形式はコンビーナーに決定権があるものの、通常のセッションと全く同じ扱いになっており、招待講演および一般講演いずれも通常と同じ方法で講演申し込みを行い、通常の講演と同じ登壇料を払って発表するシステムのことである。

さて、最近、大学や研究機関等の研究成果を国民に還元することが求められ、また、大学や研究機関等も、積極的にその研究成果や施設を一般市民に公開し、地域に根付いた大学や研究機関を目指そうという努力がなされるようになってきている。このような社会情勢の変化や、大学や研究機関等における意識の変化のため、公開講座や施設公開、高校生向けセミナーなどを定期的に行う大学や研究機関等が増えてきており、様々なノウハウや問題点が蓄積されていると思われる。また、これまでこのような取り組みを行っていないところでも、今後機会があれば行いたいと考えているところも少なくないと思われる。

そこで今回の企画セッションでは、「公開講座・一般公開等に関するアンケート調査」を行ってその実態を調査するとともに、代表的ないくつかの取り組みについて基調講演を行っていただき、その実施に関する様々なノウハウや問題点を出し合って共有することにより、今後の活動に活かしていくことを目的とした。

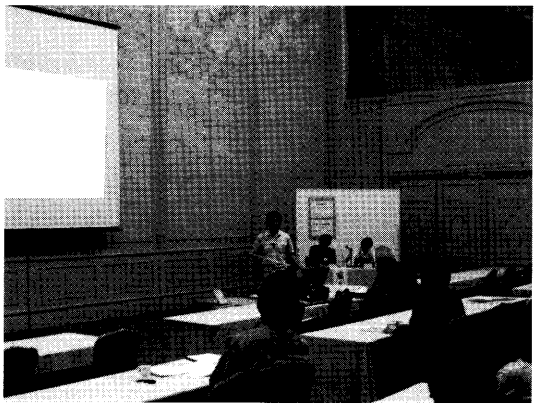

図1　基調講演の一場面

座長はコンビーナーの一人である加藤万里子氏(慶應義塾大学)が勤めた。最初に、沢(愛知教育大学)が「公開講座・一般公開等に関するアンケート調査」について報告した。アンケートには11大学および4研究機関から回答があり、その活動としては、公開講座、施設公開（特別および常設）、観望会、小・中学生を対象としたセミナー、高校生を対象とした合宿型セミナー、講習会、出前講座、オープンキャンパスなど、多種多様であることが報告された。

次に、福井康雄氏(名古屋大学)による「11年目を迎えた天文学公開セミナー」についての基調講演があった。名古屋大学のこの取り組みは、3日間の日程の中に講義や実験・実習が組み込まれている本格的なセミナーであること、社会教育施設である名古屋市科学館との共催であることなど、非常にユニークで先駆

的な活動であることが報告された。参加者は例年300名ほどあり、その活動の活発さをうかがい知ることができた。宇宙関係のスタッフおよび大学院生がほぼ全員参加の体制で運営しているため、スタッフや院生の教育に対する意識の向上やプレゼンテーションの向上が見られるというメリットが報告された。しかし、当初は高校生に対する名古屋大学の宣伝を主たる目的とし、高校生や高校の先生を主なターゲットにしていたが、60歳以上の高齢の方参加が年々増加しており、肝心の高校生の参加は非常に少ないとの現実も報告された。

3つめの基調講演は、中田好一氏(東京大学)による「木曽観測所が行なうパブリックアウトリーチ」であった。木曽観測所では、施設公開、学校への出張授業、高校生を対象とした宿泊型のセミナー「銀河学校」の3つの大きな活動を行っているとの報告があった。その中で、施設公開に関して、実施する側が知って欲しい内容と、参加する側が知りたい内容に関してしばしばミスマッチがあり、今後は、基本的に夜の観望会を中心に方針を転換しようと考えているという報告が印象に残っている。また、銀河学校については非常にアクティブな高校生が集まるので、セミナー修了後も銀河学校同窓会のようなものを自主的に作って活発に活動するとともに、高校を卒業後、研究者を目指す学生も現れているとの報告があった。

最後の基調講演は、上野悟氏(京都大学)による「京都大学理学研究科附属天文台の天文教育・啓蒙事業の紹介」であった。京都大学の花山天文台ではかなり以前から観望会などを行っていたが、数年前から、飛騨天文台と花山天文台をインターネットで結び、同時ライブ公開を行うようになったこと、その運営にあたっては、スタッフや院生数の多い花山天文台では比較的スムーズに行えるが、その絶対数の少ない飛騨天文台では、参加者を4グループに分け、リピートすることで対処していることなど、問題点とその克服方法の紹介があった。

いずれも、それぞれの特徴を活かした独自の活動を行っており、非常に参考になったのではないかと思われる。

この基調講演のあと若干の質疑応答を行い、引き続いて一般の講演に入った。まず、国立天文台各氏による国立天文台の活動の報告、「公開講座・一般公開事業の概要(渡部潤一氏)」、「ハワイ観測所における広報普及教育活動(布施哲治氏)」、「三鷹キャンパス常時公開の成果と課題(縣秀彦氏)」、「三鷹キャンパス定例天体観望会(内藤誠一郎氏)」、「野辺山における常時及び特別公開の現状(御子柴廣氏)」があった。直後のディスカッションでは、「国立天文台は広報・普及も業務の一部であるから、行って当然」という声もあったが、やはりそれぞれに研究の合間を縫ってその実施に努力している姿が伺えた。

次のセッションでは、主に教育系大学の活動についての報告があった。特に平井正則氏(福岡教育大学)による「教育系大学の天文観測施設の利用と公開－福岡教育大学の場合－」の報告の中で、「1980年に望遠鏡が設置されて以来、学生、理科の教師、近くの子供会などを対象に月1回程度の観望会を行っていたが、1985年ころに全国国立学部長・学長会議で、福岡教育大学など教育系の観測施設の一般公開について話題になり、福岡教育大学の観測施設の一般公開の取り組みについて具体的な例として議論してもらったところ、『国立大学の教育系観測施設は一般公開でなく教育実践に使用すべきである』という結論に達し、その指示があった。したがって教育系を中心にした使用しか実施が困難になった」との報告があり、その認識に違いの大きさに驚かされた。また、安藤享平氏(郡山市ふれあい科学館)による「愛知教育大学天文台一般公開1大学における一般公開の意義」では、

図2　講演に聴き入る参加者。7つの会場でそれぞれセッションが行われているにもかかわらず、80名以上の参加者があった。

大学の研究機関としての研究の紹介と天文研究者の顔の見える活動を基本目標にかかげて一般公開を企画したこと、次の後藤純也氏（愛知教育大学）による「2 一般公開の実際」では、ほぼ2ヶ月に1回のペースで、講座と観望会を続けていることが紹介された。

最後のセッションでは、「大阪府立大学総合科学部における天文普及活動」米倉覚則氏（大阪府立大学）、「『小さな天文学者の会』の活動と研究機関の社会貢献」柴田晋平氏（山形大学）、「科学館側から見た公開セミナー『天文学の最前線』」野田学氏（名古屋市科学館）について、ポスターの紹介があった。特に、「小さな天文学者の会」のユニークな活動については、質疑が数多くあった。

この他、ポスターのみの7つの発表（木曽観測所3件、国立天文台1件、千葉大学1件、和歌山大学1件、ぐんま天文台1件）もあり、発表数は、基調講演も含めると22件であった。セッションは学会全体で7つのパラレルセッションであったが、それにもかかわらず参加者は80名を越え（図2）、ひとまず成功のうちに終わることができたと思っている。

最後に、アンケート調査で得られた活動の工夫している点や問題点、ディスカッションで出された意見などを列挙しておく。

まず、実施で工夫している点としては、

・参加者が増えるように、学園祭と同時開催した
・講義よりも実験に時間を割くようにした
・講座と観望会を合体させた
・新聞、雑誌、TVなど、できるだけ幅広く広報した
・一度参加した人には、次回の案内を送っている

などがあった。いずれも参加者を増やすこと、参加者がより楽しめることのための工夫といえよう。

次に、実施にあたっての問題点としては、

・天候に左右される
・予算不足
・スタッフ不足でボランティア頼り
・見学団体から説明の要望が多いが応じきれない
・職員や研究員の負担が大きい
・高校生の参加を期待したが、高校生は思ったほど集まらなかった
・参加者に喜ばれるものと、実施者が伝えたいことが必ずしも一致しない

・観光ルートのつもりで団体客に立ち寄られると対応に苦慮する
・講演会で100名以上の参加者の集めるのは非常に困難

などがあった。

ディスカッションで出てきたいくつかの意見としては、

・「啓蒙」という言葉は、我々が教え広めるという、いわば上からの発想の言葉であり、使うべきではない
・予算不足については「子どもゆめ基金」など、お金を出してくれるところがあるので、チャレンジしてみてはどうか
・各自の活動はそれぞれで宣伝を行っていると思うが、どこか一括してそれらを紹介するようなWebサイトが欲しい

などである。最後のWebサイトに関しては、国立天文台でそのような情報を公開しているので、是非国立天文台にその情報を寄せて欲しいとの発言があった。

いずれにせよ、それぞれの大学や研究機関で、それぞれ活発に広報・普及活動を行っていることが明らかになり、この企画セッション開催の意義はそれなりに達成されたと思っている。